お気に入りの孤独

田辺聖子

お気に入りの孤独

田辺聖子

お気に入りの孤独
1991年1月25日第1刷発行
1991年6月26日第4刷発行

著者／田辺聖子(たなべ せいこ)
発行者／若菜　正
発行所／株式会社集英社
〒101-50東京都千代田区一ツ橋2-5-10
☎03-3230-6100(編集部)3230-6393(販売部)3230-6080[製作課]
印刷所／中央精版印刷
©S.TANABE Printed in Japan 1991
ISBN4-08-772775-0 C0093

検印廃止
乱丁、落丁本が万一ございましたら、
小社製作課宛にお送りください。
送料は小社負担でお取替え致します。
本書の内容の一部または全部を無断で
複写、複製することは
法律で認められた場合を除き、
著作権の侵害となります。

お気に入りの孤独 ❖ 目次

幸福のトロ味について——7
男の子について——41
無難について——87

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

かくしごとについて——132
愛の塩漬について——187
人生の旬について——233

装画　福山小夜
装幀　岡　邦彦

お気に入りの孤独

幸福のトロ味について

1

その歌でちょっとした思いつきがあった。

日曜の朝、私はオムレツをつくるため、卵を割りながら、ナゼカこの頃、口にのぼってきてしかたのない歌を唄ってたんだけど。

♫ 大阪で生まれた女やさかい
大阪の街　よう捨てん
大阪で生まれた女やさかい
東京へは　ようついていかん……

（作詞　BORO）

このあいだ、夫の涼(りょう)といっしょにいったスナックで、知らない女客がマイクを握って、しみじみとこの歌を唄っていた。四十くらいにみえたけれど、オバンくさくはなく、「仕事持ち」という雰囲気だった。「子持ち」「亭主持ち」というにおいはしなかった。「子持ち」「亭主持ち」なら主婦じゃないか、ということになるが、それとも違う。

主婦は「家庭持ち」というムードなのである。

これはイッパツでわかる。トロ味のある風合いで、どことなく、

「テロン」

としているのが「家庭持ち」である。

この、テロンの感じを説明するのはむつかしいんだけれども、私は自分の仕事の関係から布地にたとえると、(私、ファッションデザイナーなのだ)シルク100%のトロ味ではなく、ポリエステル100%の風合い、それとも、トリアセテート65%にレーヨン20%、ナイロン15%……というところかな、そういう「テロン」とした感じ。「シャキッ」の反対。

これは、私は「幸福のトロ味」というものじゃないかと思ってる。「家庭持ち」の女は、ゲームの札が思い通りに自分の手もとに集った満足感のあまり、「テロン」となるのだろう。女の満足感は幸福とイコールである。

しかし「仕事持ち」は仕事の苦労がついてまわるので、亭主や子供の札が手もとにうまく集っても、それだけで「テロン」とはならない。どうしてもなれない。

「仕事持ち」で「亭主持ち」「子持ち」を兼ねる女もいるが、彼女らにもはや「テロン」のトロ

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

味は失われている。

そうして「仕事持ち」になったが最後、女たちは蜊蛤(ざりがに)みたいにガシャガシャと生きざるを得ない。どっちがいい悪いってもんじゃないけど。

しかしBORORの歌をしみじみ唄っていたその四十女は、ザリガニなりに、人生経験を積んだせいか年齢(とし)のせいか、いいトロ味がついていた。美しい声じゃないけど、情感があった。

♫ たどりついたら　一人の部屋
裸電球をつけたけど又消して
あなたの顔を　思い出しながら
終わりかなと思ったら泣けてきた

大阪で生まれた女やけど
大阪の街を出よう
大阪で生まれた女やけど
あなたについてゆこうと決めた……

私も何だかしみじみと聴き、私はまだどっちへまわってもトロ味の出ない女だけど、同じことなら「仕事持ち」女のトロ味がいいな、と思ったりしていた。彼女のは人生のトロ味だろう。

涼のほうはそんな感慨はないらしく、
（古い歌、唄とんな）
というだけ。
しかし私はなぜか、それから、この歌が口にのぼってきてしかたない。
会社で仕事をしているときも、家へ帰っても。涼と飲んでる時も、涼と寝てるときも。
ところで思いつき、っていうのは、
（なんで「東京」へついていくのが女でないといけないんだろう？……）
という疑問だった。
♫　大阪で生まれた男やさかい
　　東京へは　ようついていかん……
と男が唄ってもいいんじゃないか。
私は去年、会社から、東京支社へ行けへんかといわれ、いいナー、と思ったのだが、予期したように夫と、夫の母の反対に会い、「残念ですけど」と会社にいわなくてはならなくなった。涼は親爺さんの経営する神戸の輸入家具の会社に勤めているが、そこだって東京に支店があるから、二人揃って東京で働くこともできないではない、などと自分勝手に考えていたのは甘かった。涼は一人息子で〝ザコン〟男だから、涼が東京に行くとすると涼のお袋さんも、
「それじゃ東京へ、あたしも行かなくちゃ……」
ということになりそうだった。

また、私の単身赴任、ということも考えてみた。土曜日には帰りますから、って……。
しかしこれは涼が怒ってお袋さんに早速、いいつけにいき、（涼は自分の判断をお袋さんにたしかめてもらう癖がある）お袋さんが急いで車を運転して私をたしなめるためにやってきた。
「風里さん、そりゃないわよ、結婚二年目で離れ離れになるなんて、絶対反対よ」
そう聞くと、いかにも私と涼はみっちり一緒にいて新婚時代を楽しんでいるように聞こえるが、かなりの時間、涼はお袋さんと過ごしている。会社の帰りに、そのほうが近い東神戸の家に寄り、そのあと西宮の私たちのマンションへ帰ってくる。東神戸の家は広いので最初から同居してもいいのだが、そして私もかまわないと思ってたのだけど、
「やっぱり二人で暮したいんじゃない？　二、三年は」
などというお袋さんの粋なはからいで、西宮の山手の賃貸マンションで結婚生活をスタートしたのだった。……と思ったのは私のあさはかな思いこみで、涼は絶えずお袋さんのもとへ入り浸っていた。
電話もかけまくる。お袋さんに、
「あ……僕や。あのな、オカーチャン」
というのは涼の口ぐせ。
もともと、こんなマザコンだというのは想像できないではなかった。それでもそのころの涼は、それさえ魅力的で可愛かった。
私の会社で企画したコレクションのショーがあった。それにヨーロッパ家具を貸してもらおう

ということになり、涼がその折衝で私の前に現われた。あの人、関学ボーイやて、と会社の女の子たちがいっていたが、これは関西学院大出身、ということである。阪神間で関学ボーイというと、お坊ちゃんというイメージがあるが、涼はお坊ちゃんには違いないけど、そのいい意味のほうの要素、素直で、のしかかりやすい男にみえた。操縦しやすい、とか、御しやすい、というコトバがあるらしいけど、私からいえば、「のしかかりやすい」といったほうがぴったり。私より年下かな、なんて思ってたら、二つ上だというのでびっくりした。もう三十になってるわけ、それなのにどこか無垢で、私の庇護欲をそそった。

仕事の話をしてる私の顔をじーっとみとれてて、その無警戒ぶりを私に看破されてるのに気付かなかったり。

私と顔を合せるのが嬉しい、という気持を隠すのをすっかり忘れてたり。

仕事はすぐ終ったけど、涼とのつきあいは続いていた。涼がマザコンだというのはすぐわかった。いつもいつもお袋さんのことを話題にするのだから。大きい、ムクムクした男、（太りすぎを警戒してテニスをやっているが、どちらかというと、おなかが出はじめている）血色のいい、丸いパンみたいな顔、（それはよく見ると中々素性のいい目鼻立ちで、ちょうど梨園の御曹司というか、歌舞伎役者の若手というような顔なんだけど、何しろ私を見るときはすっかり表情がゆるみ、だらしなくなって、

「笑わんとこ、思ても、笑えてくる……」

というような感じなので、かなり甘ったるくみえる）——そんな男が、家へ帰ってお袋に、

（あのな、今日な……）
と息せききって私のことをしゃべっているのかと思うと、可愛くなくもないのだった。
女の子の中には、（気色わるいわ、あんなマザコン）というのもいたが、私はファッション産業で働く男たちの気むずかしさや、梶の取りにくさに難儀することもあるので、「のしかかりやすい」男が好もしかった。
私だって、その時は二十八、男もイロイロ知ってたけど、こんな無垢の、女に内かぶとを見透かされやすい、女のいいなりになりそうな、女に惚れてることをダダ漏りにみせて平気な、素直な男ははじめてだった。
だんだん、涼が可愛くなった。
恋する、というより、可愛くなってしまったのだった。
これは困ってしまう。おねだりする子供、せがまれる子供に親が根負けして、言い分を通してやるように、純粋にしつこく、無垢な我欲に輝いてせがまれると、
（まっ、いいか。——こんなに可愛く迫るんだから）
という感じで寝てしまった。
涼はそれからいよいよ夢中になったけど、私も冷めたとはいいにくい。涼を見てると、可愛さのあまり、
「ムギュッ」
と抓りたくなる。

こんなことってあるかしら。男が可愛くてちょっと撲り倒したくなる、なんて。ムギュッと抓ったり、ちょいと撲つってやったりしたら、こいつどんな顔しよるかなあ、なんて思うのも面白かった。

涼の家へ連れていかれて、お袋さんに会わせられた。これが才色兼備の美しい人でびっくりした。阪神間の上流婦人らしく、関西弁のアクセントで標準語を操り、そのころ五十二、三だったけど、四十代の前半にしかみえなかった。しかも色気たっぷりでみずみずしく、声は少し気取っていたが、風采と釣り合い、上品だった。髪はまだ充分黒々として（染めているのかも分らないが）ふんわりとウェーブがかかり、ずいぶん長く、肩を掩っていた。ショッキングピンクのシャツブラウス、（それはパリスのシルクらしいけど）シルクの節織りの白いスカートといういでたち、ルージュは濃くて、涼によく似た目鼻立ちだから派手な美女にみえた。

庭にプールがあり、それは彼女が水泳に凝ってから作らせたものだそうである。

「ファッションのお仕事のかたらしいわね、粋でいらっしゃるわ」

と彼女は私をほめたが、私はそのころまだはやっていた黒を着ていた。しかし彼女にそういわれると、私は何だか自分がカラスにでもなったような気がして怯んでしまい、この年上女性（としかいいようのない圧迫感）に当惑した。若く見えすぎるってことは、下品なんじゃないか、と疑った。

私はかねて、下品と上品のちがいに関心を持っていた。私の会社では、ファッションは大衆のライフスタイルを示唆する役目を担う、というポリシーを掲げていて、そこでは上品も下品も問

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com